

May. 2007

Vol.4

—巻頭言—

「音楽奉仕者と共に」



理事 植木 紀夫

日頃教会で礼拝奏楽や聖歌隊指導を担当している一音楽奉仕者としての視点で、私は、福音讃美歌協会の働きに関わらせていただく中でいつも意識しようと努めていることがあります。それは、少し気が早いと思われるかもしれませんが、この働きの実が、教会の現場で用いられるその実際の場を思い浮かべ、想像しながら、会衆讃美と讃美歌等の課題に関わっていくことです。

福音讃美歌協会が設立された大きな理由の一つは「福音主義の見地からの会衆讃美・讃美歌集への取り組み」の必要があったからであると思います。少し硬く聞こえるかもしれませんが、私流に言い換えさせて頂くならば、それは諸教会がこの働きを通して励まされ、ますます歌う教会とされ続けていくことではないか、と思います。

そのためにも、教会で何らかの音楽の奉仕に携わっておられる兄弟へ、二つほどお願いしたいことがあります。

一つは今後、セミナーやジャーナル誌上等で紹介される曲等に関して、教会の現場からのレスポンスをお寄せ頂きたいという

ことです。「教会と一緒に歌ってみたら・・・でした」という視点は、働きの助けになります。福音主義の見地から取り組まれた歌が、実際に歌われることを通し、会衆の歌となっていく過程。それを思い浮かべ、想像し、見据えていくことは、讃美歌委員会での取り組み等においてもとても大切なことの一つです。

もう一つは、礼拝における牧師先生のイニシアチブに信頼しつつ、これまで同様に日常の音楽奉仕を継続して頂きたいということです。当たり前のように聞こえるかもしれませんが、将来、讃美歌集を発行する予定ですが、それはゴールではなく始まりに過ぎません。教会の現場でそれを用い、会衆を助けて下さる音楽奉仕者がいるから、今もそこで待っていてくださるから、この働きは前進できるのです。

私自身一音楽奉仕者として、待っていてくださる皆さんと共に教会での音楽奉仕のただ中にながら、福音讃美歌協会の働きに携わる一人でいたいと願っております。



第4回 教会音楽セミナーが開催されました。

「さんびかを歌う、さんびかを考える」

～福音讃美歌協会が検討する新しい讃美歌～

2006年11月20日(月)19時～ 於:キリスト教朝顔教会 参加者27名

第4回の教会音楽セミナーは、福音讃美歌協会のセミナーとしては初めて讃美歌委員会の企画によって、同委員会の取り組みを4名の讃美歌委員が紹介する形で行いました。そのためセミナー当日のプログラムは、楽譜が印刷されたものを用意しました。歌詞と曲に関し、日本音楽著作権協会の許諾を得ましたが、その手続きを通して著作権のことについても学ばされました。セミナーで扱われた以下の讃美歌作品の歌詞・曲掲載のプログラム印刷のため、著作権料としておよそ15000円が必要となりました。今後の働きの経済的な必要についても教えられました。

「さんびかを歌う、さんびかを考える」

① テイモシー・ダドリー＝スミスの讃美歌

「ゆたかに実る木」

「七つの燭台の真中を歩まれる主」

「わが主は試み受け」

中山 信児

(讃美歌委員、菅生キリスト教会牧師)



中山委員によって、テイモシー・ダドリー＝スミスの讃美歌の新訳が紹介されました。最初の曲「ゆたかに実る木」は英語の原詩は4節のみですが、中山委員による訳は8節になっています。原詩の意味を失わないことを優先に訳す、と長くなる、特に口語では量が多くなることを、共に歌い、分かちました。

テイモシー・ダドリー＝スミスは現代、英国の代表的な讃美歌作詩家の一人。ジョン・ストットとも交わりが深く、福音的な信仰に立っていること、作詩においては、自分の体験ではなく、聖書を韻律することを得意分野としていること等が紹介され

ました。中山委員が今回翻訳し紹介した3曲は、これまで日本ではあまり歌われていない聖書の箇所を選びました。「ゆたかに実る木」(ガラテヤ 5:22-23)、「七つの燭台の真中を歩まれる主」(黙示録 1:12-18)、「わが主は試み受け」(マタイ 4:1-11、ルカ 4:1-13)。みことばをしっかりと歌っていくことは、日本の福音派にとって重要なことではないか、との想いからの取り組みです

「七つの燭台の真中を歩まれる主」では、より多くの字数で訳し9・10・9・10・10・10のシラブルを持つ曲にあてはめました。

「わが主は試み受け」では、この詩を最初に訳してから今まで、訳は半分程替えてしまったとのこと。歌い、歌われながら練られていったこと。自分だけではなく、自分以外の人の意識が入ってくることで、詩の有り様も変化し、公同的になっていくのではないか、と気づかされたこと。讃美歌委員会でのやりとりでそのような経験をしていること、等の経験が語られました。

注:「新しい歌を主に歌え ～礼拝と会衆讃美と讃美歌集の現在を探る」(いのちのことば社、21世紀ブックレット 24、ISBN4-264-02204-5)に、中山委員により「ダドリー＝スミスとジュビラテ・グループ ―英国における福音的な讃美歌の創作運動―」が寄稿されています。

② 英語圏主要レパートリー讃美歌の新翻訳 「われらの罪をゆるし」

井上 義
(讃美歌委員長、等々力教会牧師)



井上委員長からは、英語圏でよく歌われており日本でも紹介されながら、あまり歌われていない讃美歌作品「われらの罪をゆるし」(讃美歌第2編 230番)について、その旋律の日本語での翻訳歌唱、についてでした。

英語圏の讃美歌には、メロディーと詩を独立して認識する伝統があります。一つの詩を、別のメロディーで歌ってみることが多くあります。この讃美歌は、作者のチャールズ・ウェスレー自身の回心と十字架の死に気づいた驚きが結びついた良いサンプルです。メロディーそのもののエネルギーに、この詩のエネルギーが結びつくのです。原詩は「私が関心を持つことがあり得るのだ。救い主の血、というものへの関心を…」のように倒置法が多い内容です。そのようなひきつけるもの、感動が讃美歌第2編では訳されていないと思われます。一節後半、讃美歌第2編が、複数の音符を使って母音を伸ばしながら「すくいめーぐーみーにーあーずーかーらーしめー

たもう」とした箇所、井上委員試訳はほぼ全ての音符にシラブルを対応させ「しょうりのみさかえあたうるみかみのあいをばたたえうたわん」とし、そのように言葉を埋めることで、この詩のエネルギーと曲のエネルギーを合致させることを試みました。音楽的には決して洗練されたメロディーではないとの意見もあり、和声上の終止形が凸凹でその進行に一貫性がないとも言えるにも関わらず、この曲の持つエネルギーは、福音的な教会に相応しいものではないか、と、旋律の日本語での翻訳歌唱を考察しつつ、締めくくられました。



③ 讃美歌の音楽

～作曲者の視点から～

土井 康司

(讃美歌委員、下北沢聖書教会会員)



土井委員の講演は、まず、信徒の讃美歌委員として信徒奉仕者との架け橋として奉仕していきたい、とのお話から始まりました。作曲者として、言葉への作曲に際し込めた想い、歌詞と音楽がなかなか合わない苦勞、しかしそれぞれに制限

があるからこそ吟味する、というプロセスがあること等が紹介されました。『頌栄』では、「父」「御子」「御霊」に殆ど同じ音型を用いたこと、「主」の部分に一番高い音をあてたこと等が紹介されました。

④ 讃美歌の音楽

～和声構造の一考察～

植木 紀夫

(讃美歌委員、キリスト教朝顔教会教師)



最後に植木は、讃美歌曲の和声進行についての一考察を試みました。音楽の展開と歌詞の構造の一致について。曲の中盤で半終始になり(Ⅰ→Ⅴ)、中盤から最後に掛けて和声が解決に向かう曲では、詩も前半で「提示し」後半で「答え・解決」に向かう構造など。中山委

員の「ゆたかに実る木」の後半の和声進行は(Ⅵ→Ⅰ)で、より静かに自分に聞き入るような詩の構成に合致するのではないか等。音楽と詩の構成の合致は、歌が歌うもの自身に染み入るのをサポートする一つの取り組みの例であることを、考察しました。



セミナー参加者の様子

最後に、讃美歌委員会委員長の井上義先生から、讃美歌委員会の今後の取り組みについて説明がありました。これについては、ジャーナル第3号の6ページを参照して下さい。

記：植木紀夫

「第2回会衆賛美と讃美歌のこれからを考える札幌セミナー」報告

2007年3月2日開催 於:北海道聖書学院 参加者21名

講師:植木紀夫

北海道の有志諸教会による教会音楽札幌セミナー準備会は、福音讃美歌協会の目的「キリスト教会における会衆讃美の振興に寄与すること」を共有しています。

その「第1回教会音楽札幌セミナー」は2005年10月14日、北海道聖書学院を会場に講師植木紀夫先生をお迎えし、教会音楽札幌セミナー準備会主催、福音讃美歌協会の共催で開催しました。今回はその第2回目、同じく植木先生を講師に3月2日、同会場で「第2回会衆賛美と讃美歌のこれからを考える札幌セミナー」として開催しました。

セミナー開始前に、前回同様、植木先生と教会音楽札幌セミナー準備会の委員(下川友也、朴 永基、遠藤 稔、菜花 香、吉井節子、八尋 勝)による懇談の時を持ち、続いてセミナーを開きました。

セミナーでは第4回福音讃美歌協会主催教会音楽セミナーで発表された「さんびかを歌う、さんびかを考える」が紹介され、そこに収められている「ゆたかに実る木」、「七つの燭台の真中を歩まれる主」、「わが主は試みを受け」、「われらの罪をゆるし」、「頌栄」を20数名の参加者といっしょに歌いました。そして植木先生から讃美歌の作詞作曲の神学上、言語上、音楽上、さらに著作権上の諸問題があ

ることを教えていただきました。

第1回目セミナー時は福音讃美歌協会が発足したばかりでしたが、今回はその後の、関係者の取り組みの成果を知ることができ、出席者一同感謝しました。

また、讃美歌の作詞作曲、編纂の事業がいかに容易なことではないということ、さらに、出来上がった讃美歌もそのまま刊行するのではなく、諸教会で歌われ、吟味検討されるプロセスが必要であることを改めて認識しました。そして、讃美歌を生み出すわざはまさに教会の働きであることを再確認しました。福音讃美歌協会の結実を期待しつつ、福音主義に立つ諸教会のさらなる協力支援を呼びかけたいと思います。福音讃美歌協会に携わる方々のうえに主の祝福を祈ります。

(教会音楽札幌セミナー準備会代表:八尋 勝)



会計報告【2006.9.1～2007.3.31】

収 入		支 出	
06年8月までの繰越金	503,349	理事会費	20,040
会員年会費	170,000	ジャーナル費	96,720
献 金	10,060	セミナー費	36,159
収入合計	\684,009	委員会費	33,319
		事務費	7,430
		人件費	140,000
		予備費	7,000
		支出合計	\340,668
残 高			
収入－支出	\343,341		

【会員年会費】

[準会員]

いのちのことば社

[賛助会員]

世田谷中央教会、赤江弘之、西大寺キリスト教会、大島章義、キリスト教朝顔教会、中山信児

【献 金】

[教会] こどもの国キリスト教会

[個人] 吉沢修平、高橋和江、中山信児

(敬称略)

財務からの感謝とお願い

2005年7月に発足した「福音讃美歌協会」の働きのために、お祈りと献金を心から感謝致します。

2年目を迎え、諸教会から、「いつ頃讃美歌集が発行されますか。」「どのようにしたら、この働きのため協力できますか。」と尋ねられる事が多くなり、徐々にこの「協会」の働きが、深く、広く、受け入れられ始めていることと、同時に福音讃美協会が目指している讃美歌集が切実に必要とされていることが実感させられています。

財務担当理事として、皆様になからのお願いがあります。それは、この福音讃美歌協会が目指している讃美歌集の発行のため、お祈りと同時に、具体的に、会員(正・準・賛助)となって、献金をしていただきたいという事です。団体でも教会でも個人でも結構です。今後この活動が、いよいよ主の栄光のために用いられていくためにも、さらに「天の倉」が開かれることを……。あなたの祈りと献金が必要とされています。是非ともよろしく願い申し上げます。

財務担当理事 鎌田雅人

=会員申込み方法=

会員の種別は**正会員**（教会・教団・教派等）、**準会員**（各個教会、団体等）、**賛助会員**（各個教会、個人等）の三種類です。

賛助会員につきましては、入会申込書をご請求いただき、必要事項をご記入の上、郵送またはFAX送信してください。年会費のお振込みにより入会が完了致します。

正会員、準会員につきましては、協会へ直接お問い合わせください。入会のしおりを郵送致します。

振替口座

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127

名称 福音讃美歌協会

◆銀行口座◆

みずほ銀行 ユーカリが丘支店

普通預金 口座番号 1604668

名称 福音讃美歌協会

◆郵便貯金口座(ぱるる)◆

番号 10500-82654721

名称 福音讃美歌協会

編集後記

今回は、第四回教会音楽セミナーおよび二回目の札幌セミナーの雰囲気、少しでも皆様に伝われば、と願った企画となりました。四名の讚美歌委員の方々は、新しい讚美歌に直接取り組んでいてくださいます。一つの作品が完成するまでには、作者だけでなく歌う礼拝者の協力も必要だと教えられました。皆様のご感想等を、ぜひお寄せくださいますように。また続いてお祈りくださいますようお願いいたします。

(い)

福音讃美歌協会 (JEACS)

〒154-0015

東京都世田谷区桜新町 1-14-22

日本同盟基督教団世田谷中央教会内

TEL 03-3428-2388

FAX 03-3428-2380

福音讃美歌ジャーナル Vol.4

発行者・安藤能成

編集者・池田勇人

URL <http://www.jeacs.com>

E-mail info@jeacs.com